

27年度版教科書つれづれ 20

「ビーバーの大工事」(東京書籍・2年) 学習の手引の巻

加藤 郁夫 (読み研事務局長)

前回、「ビーバーの大工事」の小見出しについて述べたが、ここではもう一つ大きく変わった点がある。それは学習の手引である。23年度版(以下、旧版)「ビーバーの大工事」の最初には「どうぶつの ひみつを みんなで さぐろう」とあり、「●だいじな ことばを さがしながら 読みとりましょう」と「●じゅんじょに 気をつけて 読みとりましょう」と2つの課題が記されていた。ところが27年度版(以下、新版)では「どうぶつの ひみつを みんなで さぐろう」は同じなのだが、「だいじなところを さがしながら 読む」と記されているだけである。「●じゅんじょに 気をつけて 読みとりましょう」はなくなっている。

この違いは、教材本文の後にある「てびき」においてより顕著になっている。

旧版では、「◆どこに 何が 書いて あるか たしかめながら 読もう」が「てびき」の最初に置かれている。そこでは「○つぎの ことを たしかめましょう。」として「・ビーバーは、どんな じゅんじょで ダムを 作りますか。」など、内容の読みとりが位置づけられている。そして、その次のページに「◆「どうぶつの ひみつ クイズ」を 作って 出し合おう」が置かれている。

それに対し、新版の「てびき」は最初から次のようになっている。

「ビーバーの 大工事」や、ほかの 本で しらべた ことを もとに して、「どうぶつの ひみつ クイズ」を作ろう。

旧版と順序が入れ替わっているのではない。新版の「てびき」には「どうぶつの ひみつ クイズ」作りしかないのである。クイズ作りに関わって、なんと4ページにもわたって書かれているのである。

旧版にあった「◆どこに 何が 書いて あるか たしかめながら 読もう」という課題は、きれいになくなっている。

このことは、先に指摘した「●じゅんじょに 気をつけて 読みとりましょう」がなくなっていることと関係している。これが無くなったことで、「だいじなところを さがしながら 読む」だけになってしまった。そして「だいじなところ」という曖昧な表現が、クイズ作りへの傾斜をより加速させたと推測できる。

「だいじなところ」を読みとり、それが答えとなるクイズを作るという考え方のようである。しかし、そもそも「だいじなところ」とはどのようなところなのだろうか。教師が大事と考えるところなのか、子どもが大事と考えるところなのか。また、子どもによっても大事と考えるところは違ってくるであろう。どこを「だいじ」とみるかは、読み手によって変わってくる。「だいじ」という言葉は、それだけ主観性の強い言葉であることを私たちは自覚しておかなくてはならない。

クイズ作り自体をすべて否定するわけではない。低学年の子どもたちにとって、クイズ作りは学習内容に興味を持たせていく、ひとつの方法ではある。しかし、それはあくまでも手段であって目的ではない。しかし、この「てびき」をみると、クイズ作りが目的化しているのである。クイズを

作するために「ビーバーの大工事」を読むことになるのである。前回も示した「小学校学習指導要領解説（国語編）」にある「低学年では、時間的な順序や事柄の順序などを考えながら内容の大体を読むこと」がどこかに、飛んでしまうのである。

私は、クイズを作ることを通して、子どもたちが「問い」を意識していくことに意味があると考えている。クイズは、子どもだけでなく大人にとっても楽しいものである。クイズ（問い）を出されたら、なんだろうと考えるのは大人も子どもも同じである。問いは、当然のことながら答えを求めていく。問いを出されたら、その答えがわからなくても、なんだろうと考えてみようとする。

小学校の説明文だけでなく、大人が読むものにおいても、「問い」の形で問題提示を示しているものが多く存在する。それはもちろん、書き手がわからないから問うているのではない。つまり「問い」は、相手（読み手）の興味・関心を引きつけるのである。読み手の興味を問いによって惹きつけ、興味をもって文章を読み進めさせようとするレトリックなのである。

もちろん、小学校低学年でそこまでのことを教える必要はない。しかし、説明的文章を読む時に、問いの文を意識することはきちんと教えていく必要がある。たとえば、問いの文が出てきたら赤鉛筆でその文を囲むようにする。そして、その答えがどこに書かれているかを探すのである。答えが見つかったら、答えは青鉛筆で囲んでやる。そのように、低学年では問いと答えの関係をしっかりと意識できるようにしていくのである。

そのような指導をきちんとすることで、中学年・高学年、さらには中学・高校においても説明的文章を読む時に問いに意識的になることができるようになっていく。書くことにおいては、将来的に（高校や大学において）「問い」を自らが作ることが重要になっていく。小学校低学年でクイズを通して問いと答えの関係を意識することが、高校大学で自らが「問い」を作ることへとつながっていくのである。そのようなつながりに意識的になってこそ、系統的な指導が可能になるのである。

「ビーバーの大工事」にもどると、クイズ作りはそのような先々のことを意識しながら、取り組んでいくことが重要になる。子どもたちとクイズを楽しみながらも、教師の視線の先には「問い」の重要性が見えていなくてはならない。子どもたちがクイズ作りに熱中するという、目先のおもしろさや楽しさだけに目を奪われてはならないのである。

実は、学習の手引がこのようなクイズ作りに特化していくような傾向は、東京書籍の教科書だけではない。光村図書や教育出版など他社の教科書にもこの傾向は見られる。そこには、「単元を貫く言語活動」の影響があると考えるのは私だけではないだろう。「単元を貫く言語活動」の問題点については〈国語授業の改革 14 授業で子どもに必ず身につけさせたい「国語の力」〉（学文社 2014 年）の中で私も述べているので、ここでは詳しくは述べない。

学習指導要領や解説には、「単元を貫く言語活動」という表現など一言も登場していない。それが、学習指導要領解説にしっかりと述べられている「低学年では、時間的な順序や事柄の順序などを考えながら内容の大体を読むこと」を押しつけて、幅を利かせているのは、一体どうしたわけだろうか。教科書の検定はまさにこのような点にこそ向けられるべきではないだろうか。